

コミュニティガーデンを活用したコロナ禍における コミュニティ活動の提案

一般財団法人世田谷トラストまちづくり
トラストみどり課 トラストみどり担当
沓澤 拓巳

(コミュニティ形成 みどり 場所づくり)

1. はじめに

まず、コミュニティガーデンとは地域の住民グループが主体となり、公共の場や地域の空き地を利用し、趣味、学習、環境保全など多様な目的を持って植物を育てる活動のことである。都市におけるまちづくり活動のひとつとして注目されている。

なぜならこの活動が都市環境の悪化やコミュニティの希薄化、高齢者の孤立など現代社会が持つ多くの問題を解決できる能力を持っているからである。また、屋内でのコミュニティ活動がコロナ禍で厳しい状況になっていることも踏まえ、屋外のコミュニティ活動であるコミュニティガーデンに着目した。

2. 提案

今回、商業地である下北沢の「暮らし」に重点を置き、みどりを使った地域コミュニティの形成に向けて公共空間や空き地を活用したコミュニティガーデンを提案する。

下北沢を選定した理由としては、区内で2番目にみどり率(「みどり率」とは、「緑被率」に「河川等の水面が占める割合」と「公園内で樹林等の緑で覆われていない面積の割合」を加えたもの)が低い北沢地域の、その中でも緑被率が区内最低に位置する下北沢駅周辺での可能性を模索する。

今現在、下北沢駅周辺のコミュニティは駅周辺の「あそびのシモキタ」と、その周辺にある「すまいのシモキタ」に二分化されてしまっている。周辺の空き地を活用し、お互いが関わり合うことができる「のりしろ」のような役割をコミュニティガーデンに持たせることで、それぞれがシームレスにつながりより良いまちへの第一歩となるのではと考えた。

3. 活用方法と効果

敷地は駅から徒歩5分ほどのところにある空き地を使うことを想定する。

ここでのコミュニティガーデンには以下の機能を持たせた。

- ・地域の林(地域のみどりの担保と共に近隣との目隠しとなる)
- ・ベンチ(ベンチは林が作った木陰でくつろぎ、場を楽しむことができる)
- ・カフェスペース(ガーデン内のハーブなどを利用して飲みものを提供するスペース)

これらの機能を持たせたコミュニティガーデンを地域に溶け込ませることにより、

- ・駅周辺の商業コミュニティとその周辺にある住宅街とのコミュニティの交わり
- ・地域の緑化の担保
- ・まちの新たな文化の創出

という3つの効果の創出が期待できる。



地域の林・ベンチ



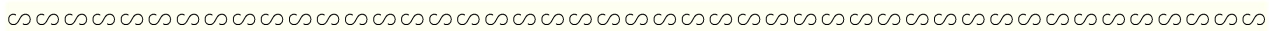
カフェスペース



ハーブガーデン



発表者



<助言者コメント> 杉原 たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）



多様な文化を発信し続けるシモキタ。2013年から小田急線の地下化が始まり、線路跡地は「下北線路街」として新しい街が生まれつつあります。全長約1.7kmの線路跡地には、ユニークな店舗、温泉旅館やホテル、保育園や学生寮、大学サテライトキャンパスなどが、線路跡地に沿ってライン状に次々にできました。かなりインパクトの強い大規模開発である一方、立地上一極集中的な開発にならざるを得ません。一方、本報告のコミュニティーガーデンは、「半径250mのあそびのシモキタ」の空き地に配置され、二極化している「すまいのシモキタ」との「糊代」となることが期待されています。小規模で点在しているからこそ「糊代」の機能が発揮するように思います。開発の担い手についても、前者が企業（組織）主導、後者が住民主体であり、双方の異なる街づくりがさらにシモキタを多様で魅力的なものとするでしょう。

実はシモキタに住む者として、「あそびのシモキタ」と「すまいのシモキタ」が適度な距離を保っていることは、いいことでもあると感じています。また、神社のお祭りや小学校行事、商店街のイベントなどを通じて双方の交流もまだ活発に行われています。むしろ、すまいのシモキタそのものにコミュニティー機能が希薄化していることを感じています。

コミュニティーガーデンは、都市部の緑被率低下に抗する有効な手段だと思います。加えて、アメリカなどの大都市では、ホームレスや低所得者の自給食糧確保の場や、貧困、薬物・アルコール中毒、暴力、差別など様々な困難を抱えている人々のアイデンティティ回復の場としても歴史的に機能してきました。本報告のご提案が、緑被率向上のみならず、社会的困難を抱える方や社会的課題を解決するようなシモキタ独自のコミュニティーガーデンとなることを期待しています！